

一九三〇年代大連・満洲における能楽

―満洲ツーリズムの発展と演能旅行

はじめに

近代日本の東アジア地域への進出に伴い、能は国外においても享受されるようになった。近年、台湾や朝鮮といった所謂「外地」における能楽享受についての研究が進展し、その実態が明らかになりつつある¹⁾。例えば朝鮮半島では、一九〇五年五月に京城で催された京釜鉄道開通式典において観世清康が能を演じ、台湾でも同年一月に喜多六平太が台湾神社大祭の奉納能を行ったことが知られる²⁾。

このうち遼東半島南部の関東州と中国東北部の満洲にも多数の日本人が居住し、早くから能や謡が享受されていた。これらの地域では、特に一九三二年の満洲国建国後に日本人が急増し、一九四二年の段階で関東州に二〇万、満洲に一〇〇万の人口を数えるに至る³⁾。同時に内地から観光で訪れる人々も増加し、最盛期にその数は二〇万人を超えたという⁴⁾。こうした「満洲ツーリズム」の興隆を背景に、内地の能役者が稽古や公演のために大連や満洲の諸都市を訪問する「演能旅行」が盛んにおこなわれた。その中には、観世左近（元滋）・

宝生重英・梅若六郎といった各流儀の家元クラスの役者も含まれている。本稿では一九三〇年代における大連・満洲への演能旅行について、満洲ツーリズムの影響とその意義を中心に考察を試みたい。

佐藤和道

一 大連・満洲における能の普及と「満洲ツーリズム」の興隆

まず先行研究に基づき、大連・満洲における能楽享受の変遷について確認しておく⁵⁾。日露戦争の勝利によって租借権を獲得した遼東半島南部の中心都市大連では、一九〇七年ごろには観世流（梅若派を含む）・宝生流が社中を形成し、喜多流がそれに続いた。一九一五年には梅若を除く三流による「大連能楽会」が結成され、同年には大正天皇大典を祝う奉祝能が催されている。また一九一七年には五世野村万造、翌一八年には生一左兵衛（緩雪）ら内地の役者による公演が行われ、一九二二年には大連西公園内に大連能楽堂が竣工するなど順調な発展を続けた。その一方で指導者が短期間で変わったり、人員不足から異流共演や「素能」と呼ばれる略式演能が行わ

れたりするなど、内地とは異なる障害も多くあったという。表1は、一九二九年に刊行された『満洲芸術壇の人々』に掲載された謡曲愛好者数を地域別・流儀別にまとめたものだが、全体の三分の一強が大連在住者が占めており、他地域に先行して愛好者コミュニティが

表1 『満洲芸術壇の人々』記載の能楽愛好者数
(1人で複数の流儀が記されている場合もそれぞれ1件と数えた。)

	観世	宝生	梅若	喜多	不明・その他	合計
大連	117	44	59	15	25	260
旅順・周水子・柳樹屯・大房身・金州・三十里堡	9	3	3	1	1	17
大石橋・営口	19	6	6	0	1	32
瓦房店・得利寺・熊岳城・鞍山・湯崗子	11	2	18	0	2	33
遼陽	15	3	12	0	2	32
奉天	15	19	11	2	3	50
撫順	3	4	58	0	1	66
本溪湖・火連寨・橋頭	12	16	0	1	0	29
安東・新義州	36	9	3	0	0	48
鉄嶺・開原・四平街・公主嶺	17	16	15	0	3	51
長春	20	2	5	0	0	27
哈爾濱・齊齊哈爾	13	2	0	10	0	25
合計	287	126	190	29	38	670

形成されていたことがわかる。⁷⁾

一方、大連以外の地域は、日露戦争後に設立された南滿洲鉄道(以下満鉄と略称)による沿線の都市開発に伴って発展した。総距離七〇〇キロに及ぶ大連―長春間の満鉄本線には、金州(大連より三二キロ、以下同じ)・大石橋(二三九キロ)・鞍山(三〇七キロ)・遼陽(三三二キロ)・蘇家屯(三八一キロ)・奉天(瀋陽・三九六キロ)・開原(五〇一キロ)・四平街(五八五キロ)などの都市があり、支線沿線には朝鮮国境の安東(蘇家屯より二六〇キロ)や炭坑都市として知られた撫順(蘇家屯より五二キロ)などがあつた。表1によれば、撫順・奉天(瀋陽)・四平街(鉄嶺・開原・公主嶺含む)・安東(新義州含む)の順に愛好者数が多い。

このうち撫順は満鉄によって炭鉱が開かれ、その周辺や撫順駅を中心に新市街が建設された。この地域は梅若流の愛好者が際立って多いのが特徴だが、これは後述のように梅若流の梅田富三郎が一九一六年より当地に居住し、社中を形成したことによる。また、清朝の王宮が置かれた奉天にも、満鉄によって設定された鉄道附属地に新たに市街が開かれ、一九一七年頃から梅若流の長塩俊三、観世流の高橋忠次郎が在住し指導を行っていた。このほか、大連在住の宝生流師範片桐発作や小坂曾外雄は、一九二三年頃より大石橋・奉天・開原・公主嶺など沿線の都市への出張教授を行っていたという。このように大連以外の地域においても、鉄道によるアクセスの改善と都市開発に伴う人口増加によって、次第に愛好者数が増加していった。

ところで『満洲芸術壇の人々』は、一九二九年までに大連を訪問

1931年4月	観世左近（元滋）	大連・旅順・鞍山・奉天	素謡	
1931年9～11月	梅若亀之	大連		
1932年7月	大西信久・手塚貞三	釜山・大田・京城・平壤・安東・奉天・鞍山・大連	能	
1934年7・8月	大槻十三	大連・旅順・鞍山・奉天・新京・安東・京城	素謡	
1934年7・8月	谷村直次郎	京城・安東・奉天・新京・鞍山・大連	素謡	
1934年3月	梅若景英	上海	能	
1934年8月	土田快助・青木永三	大連・奉天・新京	素謡	
1934年	辰巳孝一郎	大連		
1935年	坂井音次郎	上海・大連		
1935年8月	宝生重英	京城・新京・奉天・大連・青島・上海	能	満洲能楽堂舞台開
1936年10・11月	梅若六郎	大連・撫順・新京・奉天・京城	能	
1936年8月	大西信久・辰巳孝一郎・粟谷益二郎	大連・安東・奉天・新京・哈爾濱・鞍山・旅順	能	
1936年8月	川崎利吉・住駒政次・荒木兵三	大連	囃子	
1936年7・8月	坂井音次郎	大連		
1937年7月	多々良外茂三	大連	狂言	
1937年8月	島沢啓次・観世友資・坂井音次郎	大連	素謡	
1937年8月	宝生重英	大連	能	
1938年8月	梅若景英	大連・旅順・哈爾濱・新京・西安・四平街・撫順・奉天・京城	素謡	
1938年8月	坂井音次郎	大連		
1938年8月	亀井俊雄・宇野親一・荒木兵三	大連	囃子	
1939年	梅若猶義	大連	素謡	
1939年7月	幸悟朗・一噌錠二	上海・大連		
1939年	坂井音次郎・吉住清三郎	上海・大連	素謡	
1939年7・8月	大西信久・井上嘉介	大連・奉天（哈爾濱・旅順・新京・鞍山）	能	
1939年	宝生重英	大連	能	
1939年8月	佐野巖・野村諭・宝生弥一	奉天・哈爾濱・新京・大連	素謡	
1939年8月	宝生英雄	上海・南京	素謡	
1939年	高木義男	大連		
1940年5・6月	梅若六郎	青島・大連・奉天・撫順・哈爾濱・新京・京城	能	皇紀2600年奉祝
1940年8月	大槻十三・野島信	大連・鞍山・奉天・新京	素謡	
1941年6月	梅若猶義	京城・大連	素謡	
1941年8月	梅若景英	大連・營口・鞍山・蘇家屯・奉天・新京・哈爾濱・四平・西安・撫順・京城	素謡	
1942年7・8月	梅若景英	奉天・鞍山・大連・大石橋・蘇家屯・四平・新京・哈爾濱・撫順・京城	素謡	
1942年10月	梅若六郎	新京・大連・奉天・撫順	能	満洲国建国10周年
1942年10月	大西信久	北京・天津・奉天	能	天津神社奉納
1943年	梅若景英	新京・大連・北京・奉天	素謡	
1943年8月	宝生重英	新京		
1943年8・9月	野口禄久	京城・北京・上海	素謡	

した内地の能役者として以下の人々の名を列挙する。

宝生重英、瀬尾要、武田喜男、桐谷正治、佐野
巖、辰巳幸一郎、高橋徳之、本間広清、村田正
義（以上宝生流）

伊東隆三郎、武山宗治郎、谷村直次郎、清水徳
太郎、小沢良輔、泉泰一郎、生一左兵衛、生一

正雄、川本保雄（以上観世流）

高木義男（以上喜多流）

幸悟郎、藤田多賀蔵、飯島佐六、辰巳孝太郎

（以上雛子方）

野村萬斎、野村萬助、野村萬造、多々良外茂之

（以上狂言方）

全ての訪問時期や目的が判明しているわけではないが、公演を目的としたものは、先述の五世野村万造、生一左兵衛以外に宝生流の武田喜男（一九二二年）や宝生重英一行（一九二五年）が素謡会を催したことが知られる程度で、大半は稽古などのために招聘されたものと推測される。これに対し表2は、雑誌などから判明する一九三〇年以降に大陸の諸都市を訪問した内地の役者と、その訪問年、場所を掲出したものである。これによると一九三一年四月に観世左近一行が大連・旅順・鞍山・奉天を訪れたのを皮切りに、ほぼ毎年いずれかの役者がこれらの地域を訪れている。また年が進むにつれ、旅行の頻度・

表3 観世左近の演能旅行と「満鮮周遊旅程」の比較

（→は移動、地名の前は到着時刻、地名の後は出発時刻、【】は遊覧地を示す）

満鮮周遊旅程（『旅程と費用概算』1931年版に拠る）	観世左近一行の旅程（武田1931に拠る）
1日目 東京9:45→	4/21 東京→
2日目 →10:19三宮/神戸港12:00→（大阪商船大連航路）	4/22 →神戸/神戸港→
3日目 →7:00門司13:00→	4/23 →門司13:00→（大阪商船ウラル丸）
4日目 船中	4/24 船中
5日目 →8:00大連	4/25 →8:00大連【埠頭・満鉄本社・遼東ホテル・歓迎素謡会（満鉄協和会館）】
6日目 大連【埠頭・油房・苦力収容所・満蒙資源館・工業博物館・星ヶ浦・西崗子市街・老虎灘】	4/26 大連【歓迎素謡会・歓迎宴（星ヶ浦公園）・日本人街】
7日目 大連7:45→9:10旅順【白玉山・東鶏冠山北堡壘・望台・二龍山・二〇三高地】 旅順16:30→大連18:00/大連21:30→	4/27 大連10:00（車）【大連上水道貯水池】→12:00旅順【関東庁・大和ホテル・白玉山・東鶏冠山・水師營・戦役記念館・大連旅舎】→20:00大連
8日目 4:14湯崗子→4:30鞍山→6:28渾河6:49→8:10撫順【撫順炭坑（大山・東郷炭坑・露天掘）・オイルシエール工場・永安台・モンド瓦斯工場撫順城・撫順神社】撫順15:55→奉天17:20	4/28 大連9:00→14:00鞍山【素謡会・扇屋旅館】
9日目 奉天【宮殿・北陵・法輪寺・東陵】 奉天22:55→	4/29 鞍山9:20→奉天【奉天城内・北陵・歓迎素謡会・日本人街・支那劇観劇】奉天22:55→
10日目 →7:00安東→14:20平壤23:58→	4/30 →7:00安東 安東8:50→20:50京城
11日目 →7:10京城	以下未記載
12日目 →京城10:00→20:20釜山21:30→（関釜連絡船）	
13日目 →7:00下関9:00→	
14日目 →8:30東京	

規模ともに拡大し、中には数十名に及ぶ演能団を率いて朝鮮・満洲・中国の諸都市を歴訪するものも見られるようになる。

一九三一年の観世左近の演能旅行については、随行した武田宗治郎が詳しい旅程を書き残している¹⁰。武田によれば、まず神戸から海路で大連にわたり、そこから鉄道で旅順・鞍山・奉天を経て朝鮮半島に至り、釜山から船で帰国したらしい(表3参照、京城以降の旅程は未記載のため推測)。大連では、泉泰一朗をはじめとした当地在住の観世流師範が連名で「観世宗家歓迎会」を組織し、新聞広告を打つなどして一〇〇〇名ほどの観客を集め、鞍山でも「此の地としては非常の盛会」であったと伝える¹¹。また、大連の満鉄本社では副総裁と面会し、旅順では関東庁長官、関東軍司令官を訪ね、忠霊塔のある白玉山や日露戦争時に日本軍の堡壘が築かれた東鶏冠山、停戦条約が結ばれた水師営を廻った。同様に奉天でも清の二代皇帝の陵墓である北陵(昭陵)や旧市街の中心地奉天城を観光している。

表3は、この時の旅程と戦前の代表的な旅行案内書であった『旅程と費用概算』(一九三二年版)に記載された「満鮮周遊旅程」を比較したものである。これによれば八日目(四月二十八日)の滞在地に撫順と鞍山という相違があるものの、それ以外の訪問地や日程はほぼ一致しており、左近の演能旅行が既定の観光ルートに則って行われたことが明らかである。

戦前における朝鮮・満洲における旅行先については、米家泰作が一七九件の旅行記を分析し、その記載数から*奉天(二六一件)・釜山(二六一件)・*大連(二五九件)・京城(二五九件)・*旅順(二四七件)・*新京(二二二件)・*撫順(二二〇件)・*哈爾濱

(二〇七件)・平壤(二〇八件)・*安東(八九件)の二〇都市が突出して多いことを指摘している(*が満洲、数字は記載された書籍数)¹³。これらの都市は、満鉄・朝鮮鉄道沿線の中核都市という点で共通し、釜山・大連からは内地への定期船も運航されていた。一九二二年には、釜山から長春(新京)までの「満鮮直通列車」が開通し、関釜連絡船を介して東京―奉天間を六二時間ほどで結んでいる¹⁴。また日本と大連を結ぶ満洲航路は一九〇五年一月の旅順開城とともに開設され、以後大阪商船によって毎週二便の定期便が運航された¹⁵。二九年には最新式快速線の「うる丸」が就航し、三四年には使用船九隻、月二五回の運航へと拡大したという。こうした交通網の整備を背景に、満洲・朝鮮は内地から容易に訪れることができる海外旅行先となっていく。日露戦争直後には、文部省や陸軍、満鉄などの後押しを受けて修学旅行や教員の研修旅行先として盛んに取り上げられた¹⁶。また一九一八年には国内における旅行斡旋施設として東京・大阪・下関に鮮満案内所が創設されると、次第に一般市民の観光地としても認知されていった¹⁷。さらに一九三二年の満洲国建国後は、満洲各地に設立された観光協会によって組織的な宣伝広告活動が行われたほか、三四年七月に創刊された雑誌『旅行満洲』の月間発行部数が七千部に達するなど「満洲ツーリズム」は最盛期を迎える¹⁸。

一方、ケネス・ルオフは、満洲をはじめとする外地への旅行が奨励された背景に「愛国的な日本人に植民地事業の重要性をより理解させ、さらに日本の「大陸政策」、すなわち対満洲・中国政策の正しさを認識させる」目的があり、各観光地には四つのテーマ「①日

表4 大連・満洲の主要な観光名所

『満支旅行年鑑 昭和16年』ジャパン・ツーリスト・ビュロー満洲支部 編、博文館、1941年) 所載の観光地及び、高媛2002 a を基に再構成した。)

都市	①戦跡・慰霊地	②近代化の成果	③異文化	④歴史遺産	その他
旅順	白玉山 東鶏冠山北堡壘 水師管会见所 爾靈山 戦利品陳列館 (日露戦跡・関連施設)	博物館			
大連	忠霊塔 大連神社 大仏	大広場 大連駅 (新市街) 星ヶ浦遊園 (リゾート施設) 埠頭 (大連港) 碧山荘 (苦力収容所) 油房 (工場) 満洲資源館 (産業博物館)	露天市場		山の茶屋 (景勝地)
奉天	奉天神社 忠霊塔 柳条湖 北大宮 (満洲事変戦跡)	奉天駅 鐵西工業地区 南部住宅地 (新市街) 国立博物館	城内 (旧市街) 同善堂 (社会福祉施設)	北陵 天齊廟 (清朝遺跡)	
撫順	撫順神社	撫順駅 炭坑事務所 大山坑 古城子露天掘 殉難碑 (撫順炭坑関連施設)			
新京	新京神社 忠霊塔 寛城子戦蹟 南嶺戦蹟 (満洲事変戦跡)	新京駅 南新京 日本橋通 大同広場 安民広場 興安大路 大同大街 (新市街) 協和会館 (満鉄施設) 宝山 (百貨店) 旧國務院 國務院 (行政機関)		清真寺 (モスク)	宮廷府 (満洲国皇帝居住地) 建国廟 (神社)
哈爾濱	哈爾濱神社 忠霊塔 横川・沖志士之碑 (日露戦跡)	哈爾濱駅 鐵道局 博物館	キタイスカヤ 中央寺院 ロシア人墓地 (ロシア関連施設)	孔子廟 極楽寺	松花江 (景勝地)

清・日露戦争・満洲事変における日本の犠牲、②後進地域にもたらされた日本の近代化の成果、③現地住民の異なった慣習・未開の文化、④日本によるアジア文明、歴史遺産の保護」が存在したことを指摘する¹⁹。表4は、満洲の主要都市における観光地を便宜上右の①～④のテーマに分類して掲出したものであるが、これによれば、旅順は日露戦争の戦跡(①)である白玉山や東鶏冠山、水師管、二〇三高地などが主要な見学地であり、大連は、大連港や大連駅、星ヶ浦遊園など満鉄によって開発された新市街や施設(②)が中心であることがわかる。また、奉天は清朝の遺跡である北陵、天齊廟(④)、奉天駅を中心とする新市街(②)、柳条湖、北大宮といった満洲事変の戦跡(①)が、撫順は、撫順炭坑の関連施設(②)が、新京(長春)は、新たに首都として都市計画が進められた市街地や國務機関など(②)がそれぞれ主要な観光スポットとなっている。

満洲への観光旅行は、それ自身が満洲国政府や関東軍の意向に沿ったプロパガンダとしての性格を有し、満鉄やジャパン・ツーリスト・ビュローなど公的・私的の強い企業によって盛んに奨励された。先の観世左近一行も演能会とは別に、旅順では日露戦跡(①)、大連では新市街や埠頭(②)、奉天では歴史遺産(④)といった定番の観光地を訪れている。ここからは、演能旅行も一般の観光旅行と同様に、政治的な意図を背景とした「満洲

ツーリズム」の影響下にあったと考えることができるだろう。

二 満洲国の成立と演能旅行―梅若流の活動を中心に

一九三〇年代以後の満洲において特に目立った動きを見せたのが梅若流である。表3に示すように、家元梅若六郎は一九三六年・四〇年・四二年の三度満洲を訪れ、嗣子景英もほぼ毎年当地に赴いている。またその訪問地も、大連・哈爾濱・新京・西安・鞍山・撫順・蘇家屯・四平街・大石橋など満洲各地に及んでいる。

もともと梅若流は、独立以前から大連において他流の活動からは距離を置き、梅若宗家の承認を受けた指導者を常時派遣するなど、他流に比して中央との意思疎通が密に行われていた。一九二五年には有田善吉が梅若流満洲支部を結成して自ら支部長を名乗り、その後、当地在住の中川銀之助や久世哲三が支部長代理に就くなどして中央との関係を保持した。²⁰ また撫順在住の梅田富三郎は、奉天・遼陽・鞍山・大石橋・公主嶺・長春など広範囲への出張教授を行い、極めて大きな影響力を持った。さらに一九三四年には雑誌『満洲梅若』を発刊し、愛好者の交流促進を図っている。

雑誌『梅若』四卷三号（一九三六年三月）には、満洲を含む当時の梅若流社中一覧が掲載されているが、同記事によれば、満洲在住の指導者八名（有馬藤太・安東吉三郎・岩村櫻處・梅田正太郎・梅田富三郎・国政與三郎・榊精之助・久世哲三）が、一七都市（沙河鎮・大連・四平街・大石橋・鉄嶺・奉天・遼陽・海城・安東・瓦房店・鞍山・公主嶺・撫順・金州・蘇家屯・錦県・新京）に四〇に及

ぶ社中を形成し、愛好者数は概数で七〇〇名を超えている。当時大連観世流の中心的な指導者であった泉泰一朗が、

将来は全満洲合同して観世流発展のため大なる実を挙げたいものと思ひ既に前年来その下交渉を進めつゝあり、遠からず完全な纏まりを見ること信じてゐる。それには観世会満洲支部設置の必要があり、これに就ては四五年前より武田宗治郎氏との間に数回協議を進めたことはあるが未だ正式に宗家のお耳に入れたことはない。（中略）梅若氏（特に氏を用う）に於ても同様梅若会満洲支部を設置し、久世哲三氏支部長の役を勤めてゐるに鑑み大観世流に於てこの設けなきを遺憾とする人の多きは事実である。²¹

と述べたように、梅若の組織的な展開は、絶対数で優位に立つ観世流にとってさえ脅威に映っていたようである。

梅若が大連・満洲への進出に積極的であった背景には、その置かれた状況が影響している。一九二一年七月に観世流から除名される形で独立した梅若流は、シテ方五流並びにワキ・囃子・狂言の三役のほとんどと断交したため、一時的に演能不能の状況に陥った。

その後梅若に協力的な一部の役者（半玄人を含む）の参加を得て活動を継続したものの、新規の愛好者の獲得と流勢の拡大は、独立当初からの流是であったといえる。さらに一九二九年に観世流之丞が、三三年に梅若万三郎が観世流に復帰し、六郎一門のみとなった梅若流は存亡の危機に立たされる。²² 国外とはいえ、急速に日本人口が増加した大連・満洲への普及に注力することは有意義なことであるとに違いない。

一九三六年の六郎の満洲訪問は、満洲在住の愛好者や指導者からの長年の要望と流儀の宣伝・普及を図ろうとする六郎側の思惑が合致したことで実現したものであった。先の観世左近の演能旅行がシテ方を中心に八名ほどであったのに対し、六郎の場合は囃子方を含めて二〇名近くに及ぶ大規模な演能団が組織された。訪問地も左近が訪れた大連・奉天・旅順のほか、新たに満洲国の首都となった新京（長春）、梅田富三郎が拠点とする撫順、朝鮮の京城を加えている。旅程は左近の場合と同じく、まず海路で大連に渡った後、新京、撫順、奉天、京城を経て、釜山から関金連絡船で帰国するというルートを取り、日数も二週間程度とほぼ同様であった。この間新たに運行された特急「あじあ」や急行「ひかり」に乗車したほか、大連では、大連神社・忠霊塔、旅順では日露戦跡（白玉山、博物館、記念館、東鶏冠山、水師営）、奉天では、奉天神社・北陵といった定番の観光地を廻り、撫順でも観光バスで古城市の露天掘りや大山坑、製油工場などを訪れている。さらに新京では、この旅行最大の目的とされる満洲国皇帝御前での演能が予定されていた。

満洲国皇帝陛下が能を御覧になるのは今回が初めてと承ります。先年、日本御訪問の砌は遂に能を御覧に入れる機会がありませんでしたので、私は甚だ残念に思つて居りました。友邦との親善といふ点から申しても、この日本特有の国粹芸術を是非御覧に入りたいと考へて居りました所、今回の満洲行の計画を発表致しますと、流友の方達の御尽力に依り、未だ先例のない御前演奏が特に許された事は、単り梅若流の榮譽ばかりでなく、日満両国の親善に契機をなすものと、その使命の重大なるを痛感

して、伴や弟子達とともにこの重責を無事に果たしたいと念じて居ります²³

六郎にとつては、御前演能という能楽界初の榮譽を担うことで、満洲における梅若流の優位を示す意図があったと考えられる。事実「満洲国皇帝の御覧に供す 今夜東京駅を出発」(『東京朝日新聞』一〇月二七日)、「純国粹芸術を御前演舞の光榮」(『大阪朝日新聞』満洲版、一〇月三〇日)、「梅若流宗家六郎氏ら来る」(『満洲朝日新聞』一〇月一日)と各紙が報じるなど一定の宣伝効果をもたらした。しかし詳細な理由は不明だが、結局御前演能自体は直前になって中止され、代わりに張景恵國務総理に誦本を献納し、新京の演能会には諸大臣が列席している。

一方、六郎はこの旅行は「満鉄の招聘に応じ」たものであると記す。もともと満鉄は半官半民の国策会社として成立したが、満洲国建国以後は事実上関東軍の支配下に置かれ、満洲国当局の動きをバックアップする体制を取るようになる。また関東軍の主導によって成立した満洲国は「五族協和」「王道樂土」を掲げ、日本からの入国にはパスポートを不要とするなど、内地からの移住、訪問を促進していた。つまり、関東軍を背後に持つ満洲国・満鉄側にとつても、著名な文化人である六郎と満洲国要人との面会を演出することは意味のあることだったのであるまいか。同様に前年（一九三五年）の宝生重英の満洲訪問に際しても「満洲当局に於いても、この挙に非常に御賛同をされ、多大のご後援を頂いてをります」(『大阪朝日新聞』満洲版)と記述が見え、何らかの援助があったことを窺わせる。²⁴

満洲訪問に際し「最初にして或は最後」「一生一代のつもり」であつた六郎を迎えたのは、想像以上の歓待と反響であつた。その後も六郎は、ほぼ毎年嗣子景英を満洲に派遣しているが、自身も一九四〇年に皇紀二六〇〇年奉祝、一九四二年に満洲国建国一〇周年慶祝を名目に計三度の演能旅行を実施している。一九三〇年代以降、帝劇演能や技芸者之証取得などによって、他流との差別化を図る試みを次々と行つた梅若流にとつて、海外普及・日満親善を名目にした演能旅行は流儀宣伝のための大きな柱の一つとなつていたのである。

三 拡大する演能旅行―哈爾濱から天津・北京へ

満洲国の成立と日中戦争の開戦に伴い、満洲北部や華北地域への能役者の進出が見られるのもこの時期の特徴である。前掲米家稿によれば、一九二四年以前の観光地は満洲のなかでも奉天以南に偏る傾向があつたが、特に一九三五年以降に新京・哈爾濱など満洲北部への訪問者が増加したという。これは、一九三四年に大連―新京間で運行開始された特急「あじあ」が哈爾濱まで延伸され、翌三五年に東清鉄道がロシアから満洲国に売却されたことが影響しているよう。哈爾濱へは三五年以降、大西信久が一度、梅若景英が五度にわたつて訪問しているが、特に梅若流は久世哲三（一九三六年）、岩村薩馬（一九三八年）が当地へ出張教授を行い、新たな地盤として開拓を進めていた。一九三八年の梅若景英の訪問では、大連から特急「あじあ」で哈爾濱を訪れ、哈爾濱神社・忠霊塔を参拝した後、

通道街、忠霊塔、沖・横川六烈士碑、小林・向後二烈士碑、競馬場、満航会社、孔子廟、極楽寺、満人街、八区運動公園、日本人街、キタイスカヤ、松花江ヨットクラブを廻り、ロシア料理やウォッカを食している。これらの観光ルートは表4に掲げた観光地と重なる点が多く、哈爾濱の演能旅行も他都市と同様に「満洲ツーリズム」の影響下にあつたことが分かる。²⁸

さらに一九三七年七月の盧溝橋事件を機に日本軍が天津・北平（北京）を占拠したことで、隣接する満洲と華北地域との結びつきはより緊密なものとなつていった。同地へは、朝鮮鉄道や満鉄との直通列車が運行され、寝台列車を擁した「大陸」は釜山―北京間で三七時間余りで結び、運行標準時も東京標準時へと改められた。こうしたアクセスの改善を背景に、能役者も満洲から華北の諸都市へと進出していく。

北方の湾岸都市天津は、一九世紀末に日本租界が設置され、謡曲の愛好者も僅かながら存在したらしい。²⁹一九三〇年代末には大西信久門下の羽瀬清が天津松楓会を主宰し、上海紡績天津工場や天津交通会社などに社中を有していた。また、羽瀬は一九四〇年三月に北京への出張稽古を開始し、当地在住の愛好者とともに北京観世会を結成する。北京ではこのほかに観世流の北京謳楽会（河崎彰映主宰）、北京松楓会（清水雅介主宰）、小清会（小早川清土主宰）、宝生流の北京宝生会、囃子方の竹葉会などがあり、いずれもこの時期に訪問を開始したようである。また表2に示したように内地の能役者が訪問する例も少数ながら確認できる。以下は観世流の大西信久が一九四二年に北京・天津を訪問した際の記録だが、北京ではラジオ放送・

慰問能を行い、天津でもラジオ放送と天津神社の奉納能を行っている。

七日十三時半北京着ホテルで小憩、明日の会場を下見分けて放送局へ行き、二十時十分から番囃子襲上放送。八日は、皇軍慰問能。中南海公園懷仁堂内舞台で十三時始。小袖曾我、羽衣、和合、忠霊と狂言二番。九日は朝から一文字山及盧溝橋から興安門を廻って同会場で十八時から乱、吉野天人、鉢木、狂言二番。十日は、萬寿山から紫禁城を見物、此日双十節で何処も雑踏夥し、夕方急行で天津へ二十二時着。十一日は、此行の目的天津神社遷座祭式典。神前で正午から信久氏の乱を奉納講演^マした。十八時から天津神社奉賛会主催で公会堂階上特設舞台で能二番、狂言二番。十二日も同所で十三時から中継放送忠霊と鉢木。華北政務委員長王揖唐氏満洲国建国十周年慶祝使節として訪滿の帰途、此忠霊前半を観能せられた。十三日は、朝天津松風会幹事岩崎氏邸に呼ばれて番囃子を勤めて、十四時から公会堂で傷痍軍人招待、能一番、狂言二番を演じて夜行で奉天へ向^ふふ³²

北京や天津では、日本の統治下に置かれたことで邦人人口が爆発的に増加し、戦時下でありながら謡曲の会も活発に行われた。『観世』『宝生』などの能楽雑誌では、戦況悪化に伴って国内の催しが減少する中で、終刊を迎える一九四三年までは毎月のように月次会の番組が掲載されている。³³

四 上海・青島への演能旅行―満洲ツーリズムの拡大と愛好者ネットワークの構築

華北に端を発した日中戦線はその後も拡大を続け、一九三六年の第二次上海事変で日本軍は上海の租界を除く地域を接収、翌年には漢口・青島も占領する。それを受けて国際観光局は北京・香港・上海に弁事処を開設し、ジャパン・ツーリスト・ビューローも華北・華中に出張所を開くなど、中国における本格的な観光開発を開始する。³⁴ こうした観光政策の拡張は、それまで中国東北地方が中心であった演能旅行を、地理的に「飛び地」となっていた地域にまで拡大させる契機となった。

上海は、大連と並び中国最大の邦人コミュニティを有していた。日本の本格的な進出は一九一〇年代に始まり、『上海案内』（第一版、一九一三年）には、すでに宝生流の松尾相義を師範とする滬謡会・五雲会が存在したことが記載されている。³⁵ その後も宝生流では離合集散を繰り返しつつ、終戦時まで継続して愛好者の会が存在した。

このほかにも梅若流の井上亀三郎による上海緑葉会、生一左兵衛門下と思われる生一会、坂井音次郎が三九九年に復興した上海観世会、内田緑の主催した観世流松韻会などの存在が知られる。³⁶ 一方青島は、第一次大戦時に日本軍の実効支配を受けたことで邦人人口が急増したが、二二年の返還以後半減し、在住の謡曲指導者を確保するのは困難な状況にあった。また、地理的に大連と上海の中間点にあり、満鉄傘下の大連汽船によって大連―青島―上海航路が開かれていた。

そのため両都市との関係が深く、宝生流では、大連の中心的な指導者であった片桐発作（俊博）や小坂曾外雄、上海宝生会を主宰した松田良知が出張して教授に当たり、梅若流でも大連の久世哲三が一時青島に移住し鶯謡会を主宰していた。

上海・青島の能楽界は、大連に匹敵する歴史を持ちながら、地理的な問題から内地の能役者が訪れる機会は少なかった。上海へは一九三一年に田鍋惣太郎、三四年に梅若景英が訪問したのが早く、青島は一九三五年の宝生重英が嚆矢である。このうち上海へは内地から直接渡ったものであるが、宝生重英の場合は満洲演能旅行の一環として青島・上海を訪れた点に特徴がある。重英に同行した吉田魯洋によれば、この時大連に社中を抱えていた辰巳孝一郎が中心となって大連・上海・青島の愛好者と連携し、複数都市の周遊を実現したという。

そこで辰巳氏は上海の動向青島の流友に大連の情報をもたらして、同様の決意を促したのであります。上海には瀬波専平とか田村小一郎氏等の熱心家があって、多年宝生会の維持と発展に力められてゐる上に、宮本靖二氏があつて常に能楽道の隆昌につとむる処多く、当流の職分松田良知氏の努力など相応じて円満に健実に着々として発展しつゝある今日のことなので、万障を排して宗家を迎へることに決定された。青島には矢合秀勝氏等があつて日頃当流の普及発展のために尽瘁してゐられるが、何分にも同好の少数である為に多大の困難が伴ふのであつたが、好機逸すべからず、また当流の隆昌を希ふ意味から決然として断の一字を以てされ、宗家の演能を歓迎する旨を返事されたの

であります³⁷

同様に一九三九年に坂井音次郎が上海を、四〇年に梅若六郎が青島を訪れた際も、前後に大連・満洲を経由している。坂井は大連ですでに自身の社中（大連清音会）を持っており、弟子の金子堅太郎伯爵や上海在住の小鼓方宮本靖二らの仲介を受けて新たに上海の愛好者と接触を図り、上海観世会を結成する。梅若六郎もこれ以前に満洲を二度訪れていたが、この時は青島在住の黒川正六の差配によって青島訪問を実現している。

このように日本人の居住した各都市には、当地在住の指導者や有力な愛好者が存在し、相互にネットワークが存在したことが窺える。満洲演能旅行が常態化し、日中戦争の拡大によって中国本土への関心が高まりを見せる中で、こうした愛好者相互のネットワークの活用により、大陸の諸都市への訪問が実現されていったと考えられる。

おわりに

中嶋謙昌は初期の大連能楽界について考察する中で、

日本国内から大連への能楽普及が積極的に企図されたり、指導者が派遣されたりしたのではなかった。大連能楽界はあくまで植民地都市の住民が「下から」形成したものと考えられる³⁸

と指摘する。こうした状況は大連に限ったものではなく、台湾・朝鮮・満洲などの「外地」は、国内の能役者にとつては遠く離れた「辺境」の地に過ぎなかった。しかし、満洲国の成立とそれに伴うツーリズムの興隆によって満洲は内地から最も訪れやすい「海外」

となった。宝生重英は一九三五年の演能旅行に際し、

どうかして日本の能楽を広く海外にまで紹介したい、そして日本の古典芸術を知って戴き、日本の真の伝統的姿を認識して頂きたいと常々抱懐してゐました(中略)日滿関係は日と共に、緊密を加へ、今春は畏くも満洲国皇帝陛下の御訪日を仰ぐなど

両国の親善は弥が上にも重なりつゝある時に方り、私共は私共の道をもつて微力ながら一層この親善を強固ならしめたいとの念願を持ちまして遙々満洲を第一の目的地として参上いたすこととなりました⁴⁰

と述べているが、ここからは、辺境の一地方に過ぎなかった満洲が形式上は国家として独立を果たしたことで、内地の役者にとつても訪れる価値のある存在へと変容したとすることができるだろう。

註

1 「外地」は明治憲法制定以後に領有された台湾・朝鮮・樺太・南洋諸島・関東州・南満洲鉄道附属地などを指す(外務省条約局編『外地法制誌』)が、広義には満洲国や中国各地の日本人租界を含む場合があり、本稿もそれに倣うこととする。

2 『大阪時事新報』一九〇五年五月二日、『京都日出新聞』一九〇五年六月四日、『台湾日日新報』一九〇五年一〇月二六日(倉田喜弘編『明治の能楽 三』日本芸術文化振興会、一九九六年所引)。

3 関東局編『関東局管内現住人口統計 昭和一八年』、関東局、一九四四年。

4 荒山正彦「リーフレットからみる満洲ツーリズム」中西僚太郎・

関戸明子編『近代日本の視覚的経験 絵地図と古写真の世界』二〇〇八年、ナカニシヤ出版、一六八頁。

5 大連・満洲の能楽については以下の研究成果に負うところが大きい。

中嶋謙昌「大連能楽界の形成―二十世紀初頭の植民地都市と能楽」『芸能史研究』一九四、二〇一一年、同「梅田富三郎とその時代―大正期旧満洲における謡曲の広域指導」『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』六、二〇一二年、同「大正期の大連能楽会―「素能」の終焉と能の自演」、『灘中学校・灘高等学校教育研究紀要』四、二〇一四年、同「満洲」における能楽―昭和七年「大西・手塚両家満鮮演奏旅行」の周辺」『近代日本と能楽』法政大学能楽研究所、二〇一七年 a、同「大連における杉原謙(游鶴)―「外地」の能楽界と漢詩壇」『国語国文』八六―六、二〇一七年 b。

王冬蘭「大連にあった幻の能舞台 一九四五年までの現地における能楽活動の場所」『芸能史研究』二〇五、二〇一四年、同「満洲の撫順における能楽 梅若流謡曲師範梅田富三郎親子二代を中心に」『芸能史研究』二〇九、二〇一五年、同「森川荘吉と大連能楽殿・水道橋能楽堂」『芸能史研究』二二六、二〇一七年 a、同「満洲と大連における梅若流の能楽活動」『近現代演劇研究』六、日本演劇学会近現代演劇研究会、二〇一七年 b。

6 中嶋二〇一一年、二〇一四年。

7 西創生編、曠陽社出版部。

8 中嶋二〇一一年、二〇一四年。

- 9 森川荘吉「大連能楽界二十年の回顧」『満洲芸術壇の人々』二三八頁。
- 10 武田宗治郎「満洲を旅して」『観世』二巻七号、一九三二年七月。
- 11 『満洲日報』一九三二年四月二十五日、武田一九三二。
- 12 ジャパン・ツーリスト・ビューロー編、博文館、一九三二年。荒山正彦『旅程と費用概算』（一九二〇～一九四〇年）にみるツーリズム空間 樺太・台湾・朝鮮・満洲への旅程」（『関西学院大学先端社会研究所紀要』八、二〇一二年）は、一九二〇年から一九四〇年までは毎年増補改訂され、旅行のモデルルートと費用の概算、旅行案内が記されたもので、「戦前期の日本を代表する旅行案内書であった」と指摘する。
- 13 米家泰作「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究 鮮満旅行記にみるツーリズム空間」『京都市文学部研究紀要』五三、二〇一四年。
- 14 天野博之『満鉄を知るための十二章』吉川弘文館、二〇〇九年、四四頁。
- 15 劉婧「日本人旅行記からみる二〇世紀前期の大連航路」『或問』一九、関西大学近代東西言語文化接触研究会、二〇一〇年。
- 16 関連する研究成果に以下のものがある。高媛「戦勝が生み出した観光―日露戦争翌年における満洲修学旅行―」『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』七、二〇一〇年、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、宋安寧「一九〇六（明治三九）年における『満洲教員視察旅行』に関する研究」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』一（二）、二〇〇八年。
- 17 米家二〇一四、荒山正彦「戦跡とノスタルジアのあいだに「旅順」観光をめぐる」（『人文論究』五〇（四）、関西学院大学文学会、二〇〇一年）に詳しい。
- 18 荒山二〇〇八。
- 19 ケネス・ルオフ、木村剛久訳『紀元二千六百年 消費と観光のナショナルリズム』朝日選書、二〇一〇年、二五頁、二〇七、二〇八頁。
- 20 王二〇一七bによれば、名目上の支部長は六郎の次男梅若貞之であった。
- 21 泉泰一朗「満洲に於ける観世流の今昔」『観世』三巻六号、一九三二年。
- 22 当時の梅若流が「大衆能」と称する試みで観客層の拡大を図ったことは拙稿「近代における演能の場の変容―公会堂演能と梅若流の影響について」（『演劇学論集』六九、二〇一九年）において論じた。
- 23 梅若六郎「満洲国皇帝の御前演奏」『梅若』四巻一一号、一九三六年一月。
- 24 吉田魯洋「鮮、満、支の演能前奏」『宝生』一四巻八号、一九三五年八月。
- 25 梅若六郎「満洲演能を終へて」『梅若』六巻一号、一九三七年一月。
- 26 『満支旅行案内 昭和十七年版』（博文館、一九四二年）掲載の

日本旅館宿泊人員数によれば、一九三五年度に一万人代だった哈爾濱・天津の宿泊者数は、一九四〇年度末には、それぞれ約一〇〇万、三五万人にまで急増している。

27 「景英氏を迎へた満鮮各地情報」『梅若』六卷一〇号、一九三七年一〇月。

28 高媛『『楽土』を走る観光バス——一九三〇年代の『満洲』都市と帝国のドラマトゥルギー』吉見俊哉ほか編『岩波講座・近代日本の文化史』六 拡大するモダンティイ 岩波書店、二〇〇二年 a。

29 天津については、大正年間に大連在住の浮田行寿が出張教授を
行い（有田善吉「大連と天津」『謡曲界』三卷六号、一九一五年
一二月）、一九二〇年代には観世流師範として岡田太治郎・高橋
茂が居住していた（『観世流師範家名簿』『大観世』一〜六号、一
九二三年）。雑誌『宝生』『全国謡曲家名鑑』（九卷五号、一九二
九年五月）にも数名の愛好者の名が確認できる。また、日中戦争
開戦後に天津を訪れた泉泰一朗は、観世流愛好者として上野寿
（晋信洋行）、岩崎悌三郎（岩崎洋行）、弓削力蔵、牧虎一、飯田
鐘三郎（北京在住、義達洋行）の名を挙げる（泉泰一朗「北京見
物と天津案内」『観世』九卷四号、一九三八年四月）。

30 「北京謡曲同好者が相寄つて結成された北京観世会は、四月二
十八日午前十時から近水楼ホテルに於て、百有余名の官吏員、
一般同好者、婦人会員参集して、結成式をかねた皇紀二千六百年
奉祝素謡大会を盛大に挙行した。（中略）尚会長以下役員は次の
通りである。会長華北電信電話株式会社総裁 井上乙彦副会長華

北交通理事 太田久作同 華北海港事務局局長 高西敬義顧問 羽
瀬清、坂根沢三、徳光衣城、浅見親、落合兼行常任幹事五名 幹
事十五名（初瀬清「北京 北京観世会生る」『観世』一一卷六号、
一九四〇年六月）。

31 「北京宝生流謡曲同好会」『宝生』一九卷一、二号、一九四〇年、
小早川清士「北京通信」『謡曲界』五五卷五号、一九四二年一
月。四三年八月には梅若景英の北京訪問を機に北京梅若会が結成
されている（『梅若』一一卷一〇号、一九四三年一〇月）。

32 下村英一「大西信久氏一行と天津神社奉納能」『謡曲界』五五
卷六号、一九四二年一二月。

33 管見に入る各都市の最後の記録は以下の通り。北京：一九四三
年八月二九日「梅若景英傷病兵将士慰問謡会」『梅若』一一卷九
号、青島：一九四三年二月一四日「青島香風会」『梅若』一一卷
五号、上海：一九四四年二月一九日、滬宝会「宝生」二三卷一
号。

34 高媛『『二つの近代』の痕跡——一九三〇年代における『国際
観光』の展開を中心に』吉見俊哉編『一九三〇年代のメディアと
身体』青弓社、二〇〇二年 b。

35 上海の謡曲享受については拙稿「近代における海外日本人居留
民と能楽」（『能と狂言』一六、二〇一八年）において論じた。

36 坂井音次郎「軍艦旗を仰いで——上海・大連行」『観世』一〇卷
一〇号、一九三九年一〇月、島津長次郎編「支那在留邦人人名録」
第二七版、金風社、一九三五年、『大陸新報』（大陸新報社、一九
三九年〜一九四五年、ゆまに書房、マイクروفイルム版）。

37 吉田一九三五。

38 坂井一九三九。

39 中嶋二〇一一。

40 『満鮮謠曲界』二六号、一九三五年八月。仲万美子「歌舞伎、
文楽、能楽の大連公演（一九三五年）は誰によって鑑賞／支援さ
れたか―現地刊行の新聞報道記事からみた分析―」『同志社女子
大学総合文化研究所紀要』二八、二〇一一年所引。

謝辞 本稿は「第三〇回能楽フォーラム いま考える『外地演能』
（二〇一八年三月、灘高等学校、能楽学会主催）における口頭発表
に基づく。中嶋謙昌氏をはじめ、御教示を賜った各位に感謝申し上
げる。